

御山参詣を誘う

浮世絵と絵図

——北斎と貞秀を中心に——

江戸時代には、浮世絵が盛行した。肉筆画と木版画があるが、特に後者は一色刷りから多色刷りに発展する。葛飾北斎や歌川広重などが代表的な作家で、富士山を題材にした風景作品を数多く残している。富士山の風景画の先駆けといえるのが河村岷雪の『百富士』（全五巻）で、北斎や広重などに継承され、北斎の「富嶽三十六景」が刊行された。天保元年（一八三〇）頃から同四年頃までの作と考えられる。江戸における富士講の隆盛や登山ブームと相俟って多くの人々を富士の御山へ向かわせることになった。江戸を出発して、甲州道中や鎌倉海道（鎌倉往還）、富士道をたどって御山の麓へ到着し、御山入をして絶頂に立つことになった。

五雲亭（歌川）貞秀は、幕末の絵師で、俯瞰を用いた斬新な風景画を得意とし、富士山内や絶頂を描写した浮世絵を残した。

これらの江戸時代における御山参詣と登頂に関係する作品を、甲州道中をたどるものと、山麓から山内へ、とりわけ新期溶岩が生成した溶岩洞窟とその修行を描いた貞秀の作品を含めて、一連の参詣の中に位置づけて紹介したい。

『百富士』の括りに従うと、江府中（江戸市中）、裏不二（甲州道中・身延道）、東海道、そのほかの名勝地から望む富士の姿が、墨刷の絵本にまとめられている。それを参考に、江戸から富士に向かって北斎の「富嶽三十六景（山梨県立博物館蔵）」を配列し、また、一部村絵図を掲げて構成し、企画展の内容がそのまま富士参詣の手引に使えるようにした。

甲州道中・身延道



富嶽三十六景
武州
玉川

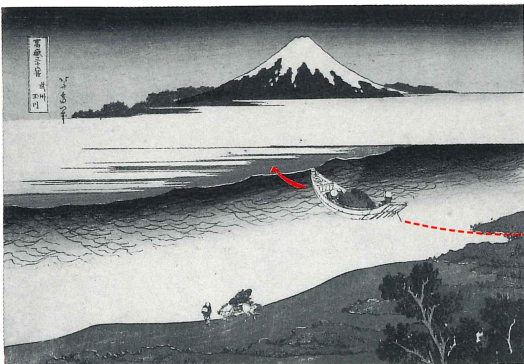
葛飾北齋筆

「富嶽三十六景」
ぶしゅうたまがわ
武州玉川

葛飾北齋筆
山梨県立博物館蔵

江戸の富士講中が御山参詣に利用したのが甲州道中と、それにつながる富士道・富士山道である。甲州道中は日野で多摩川を渡る。日野の渡付近には、現在、立日橋が架かり、西方の山脈の背後に富士山を望むことができる。

本図は、日野の渡とは特定できないが、多摩川中流域の渡船場から富士を望んだ描写であろう。富士への道は多摩川を渡って甲斐の山並みに向かって進んでいく。



富嶽三十六景
武州
玉川

葛飾北齋筆



富士三十六景
甲州
大目峠

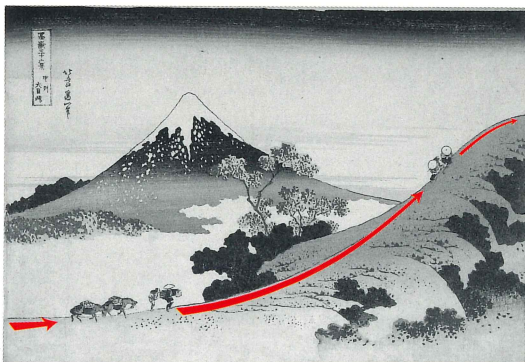
大目峠

「富士三十六景」
こうしゅういぬめどうげ
甲州大目峠

葛飾北斎筆
山梨県立博物館蔵

甲州道中は、小仏付近から山間に入り、二瀬越をわたり、境川番所を過ぎて甲州に入り、大目宿付近まで来ると、ようやく富士山を望むことができた。この絵に描かれた地形に近いのは、むしろ大目宿よりも手前の鶴川宿と野田尻宿の中間の大柵付近おおくさきと思われる。北斎が描いた大目峠は、大柵日野の富士塚付近の実景に近似する。

甲州道中を西方に向かって、峠道を旅人や馬子が登っていく。富士との間に溪谷があることをうかがわせる。



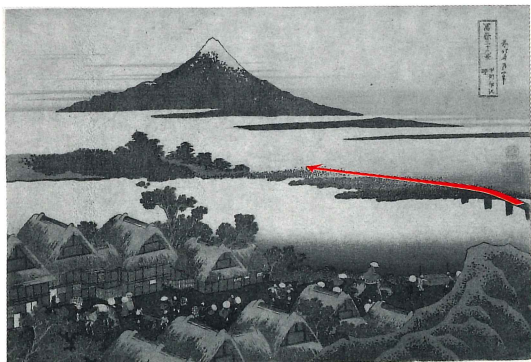


富士山三十六景
甲州伊沢
時

「富士三十六景」
甲州伊沢暁

葛飾北斎筆
山梨県立博物館蔵

石和は、甲州道中の宿場の一つで、御坂峠越の鎌倉海道（鎌倉往還）が分岐するところであった。甲州道中の石和から富士を望む。宿の背後の山からの眺望と考えられる。石和宿の町並みの背後を流れるのは鶴飼川（現、金川）で、遠妙寺の門前で甲州道中と分岐する鎌倉往還の板橋が見える。





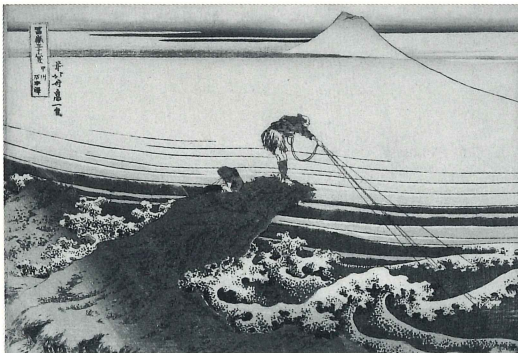
富嶽三十六景
甲州
石班澤

芥川龍之介

「富嶽三十六景」
甲州石班澤

葛飾北斎筆
山梨県立博物館蔵

富士川は、笛吹川と釜無川が合流し、駿河湾に向けて流下する川である。二つの川の合流地点に面する鰍沢は、河岸が設けられ、甲斐国中と駿河湾を結ぶ陸上・河川交通の要衝となっていた。富士川の禹之瀬南方の川辺に箱原浅間神社が祭祀される。
押し寄せる波がはげしく岩にぶつかる様子と漁師の泰然とした風情が対照的である。この付近は川越に富士を望む眺望地である。



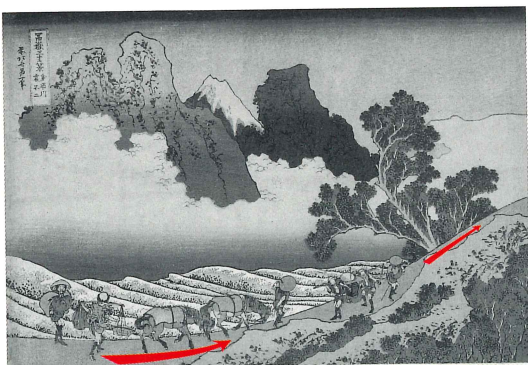


「富嶽三十六景」
 みのぶがわうらふじ
 身延川裏不二

葛飾北斎筆
 山梨県立博物館蔵

近世に「身延川」と呼ばれたのは、身延山中に源流を持ち、日蓮宗の大本山久遠寺の周辺を流れて波木井川に合流する川である。甲斐国と駿河国を結ぶ駿州往還は、身延山への参詣路であったことから、身延道とも呼ばれた。

ここから、往還道は十島を経て駿河国大宮に至る。





「富嶽三十六景」
がいふう かいせい
凱風快晴

葛飾北斎筆
山梨県立博物館蔵

山麓から仰ぐ夏の富士は雪のない姿である。富士の地肌に朝日が映えて染まる。赤富士を描いた場所を三ツ峠山とする説がある。緩やかに裾を引く富士山の姿そのままに、その場に立つと赤富士を観察することができる。富士の山もとへ到着したものだけが見ることが許される。

本図は、通称「赤富士」。凱風とは南風のこと、夏の早朝、赤みを帯びた富士の山肌が、朝日を受けて赤く輝く現象が起る。麓からの富士の山谷のみを描いている。

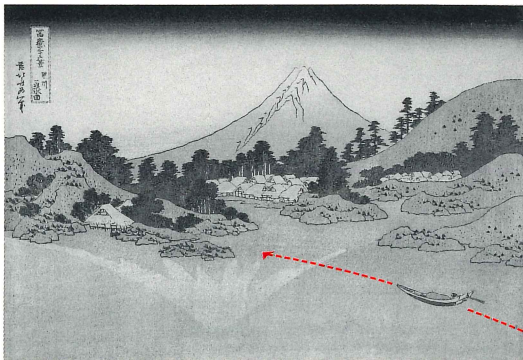




「富嶽三十六景」
こうしゅうみさかすいめん
甲州三坂水面

葛飾北斎筆
 山梨県立博物館蔵

御坂峠は甲府盆地と富士山の北麓との間にある峠で、山間部の険しい峠路を詰めると、眺望が大きく開ける。ここが、御坂峠で、河口湖の湖面の広がりが見える。富士講中は、河口湖のことを舟津池ともいい、筒口付近の千畳岩は、麓八海巡の水行場になっていた。また、川口から渡船を利用する道者の船付場でもあった。河口湖を挟んで湖岸から富士を望む。中央左寄りの鳥状の湖岸を描くが、ここは筒口付近か。中央の集落は船津村で、右側が木立村にあたり、水面に映る富士は雪を被った冬の姿である。

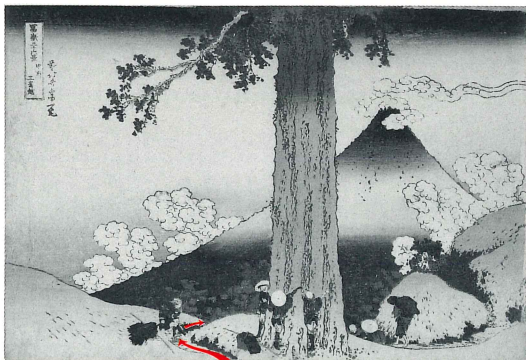




「富嶽三十六景」
こうしゅうみしまごえ
甲州三鳥越

葛飾北斎筆
山梨県立博物館蔵

三鳥越は、富士山の北面から駿河国・相模国へと続く鎌倉往還を指している。同往還の甲駿国境に近い天神峠（籠坂峠の旧峠）からは、手に取るように近くに富士を望むことができ、道は国境を越えて東口須走へ抜けていく。この峠を富士講中も往来した。籠坂峠の旧道、天神峠付近の景観であろうか。天神峠には檜の古木が存在したとされるが、それとおほしき巨木が立ち、それを巻く峠道が延びており、その後ろに夏の富士が緩やかに裾を引いている。

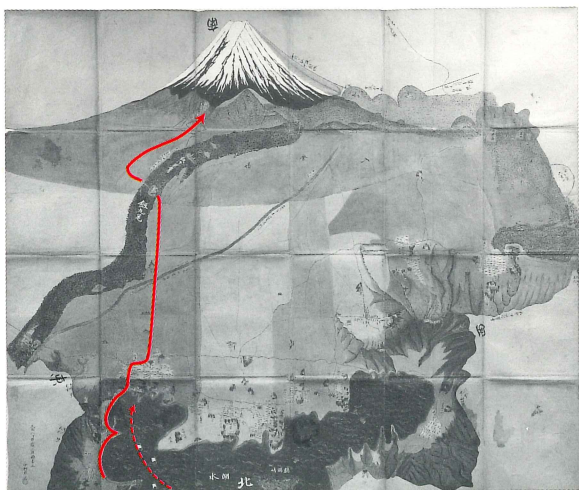


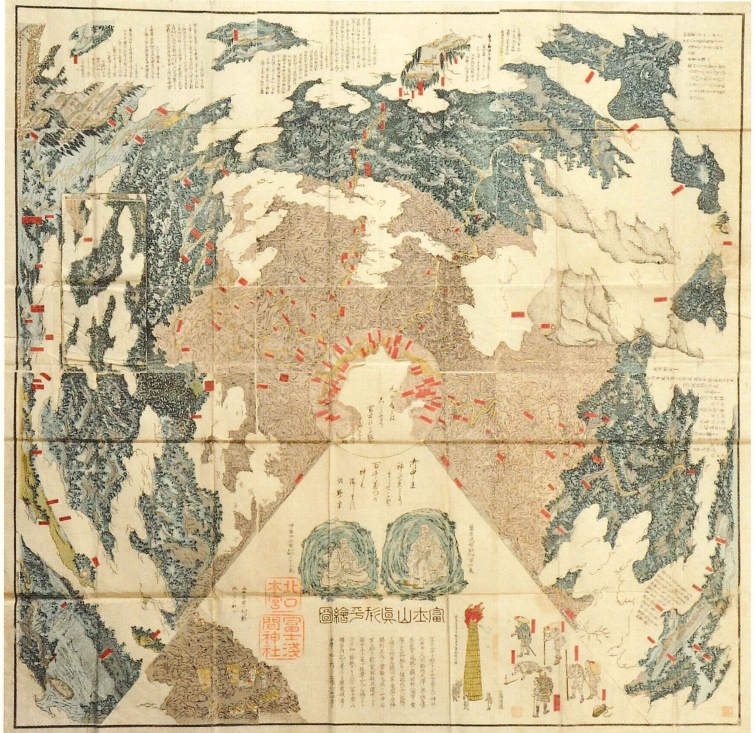


おおあらしむらほかろつかそんえず
大嵐村外六ヶ村絵図

富士河口湖町 大嵐区蔵

富士山北面には、かつて西方と称された河口湖辺の高冷な村々が点在する。長山（長尾山）・丸山等の側火山、丸尾溶岩や雪代堀など、これらに囲まれた、厳しい自然条件の中に立地している。富士山の北面に展開する裾野の入会地を広く扱い河口湖周辺の村々を丁寧に描写する。上端に富士山を秀麗に描いている。湖周辺の村々とその東側を大きく画するように、富士山内から右下端へ向けて一筋に流下する剣丸尾を描き、同丸尾を横断する細道沿いに御胎内（現、船津胎内樹型）を図化する。丸尾は刈敷や落葉などの採取に利用されていた。





富士山眞形平絵図

五雲亭貞秀筆

北口本宮富士浅間神社蔵

幕末の絵師、五雲亭（歌川）貞秀の手になる絵図で、嘉永初年頃の図を明治八年（一八七五）頃に改版したもの。貞秀は、ほかに吉田口（富士登山之全図）と、村山口を描いた「三國第一山之図」などを制作する。山麓の浅間神社を基点とする山内を描いたもので、左側に富士八海が並び、御胎内（現、船津胎内樹型）が木立中に被せ絵で、巻ると洞窟内が詳細に描写される。三角形の余白部分を内側に折り込むと、富士の立体図になる。

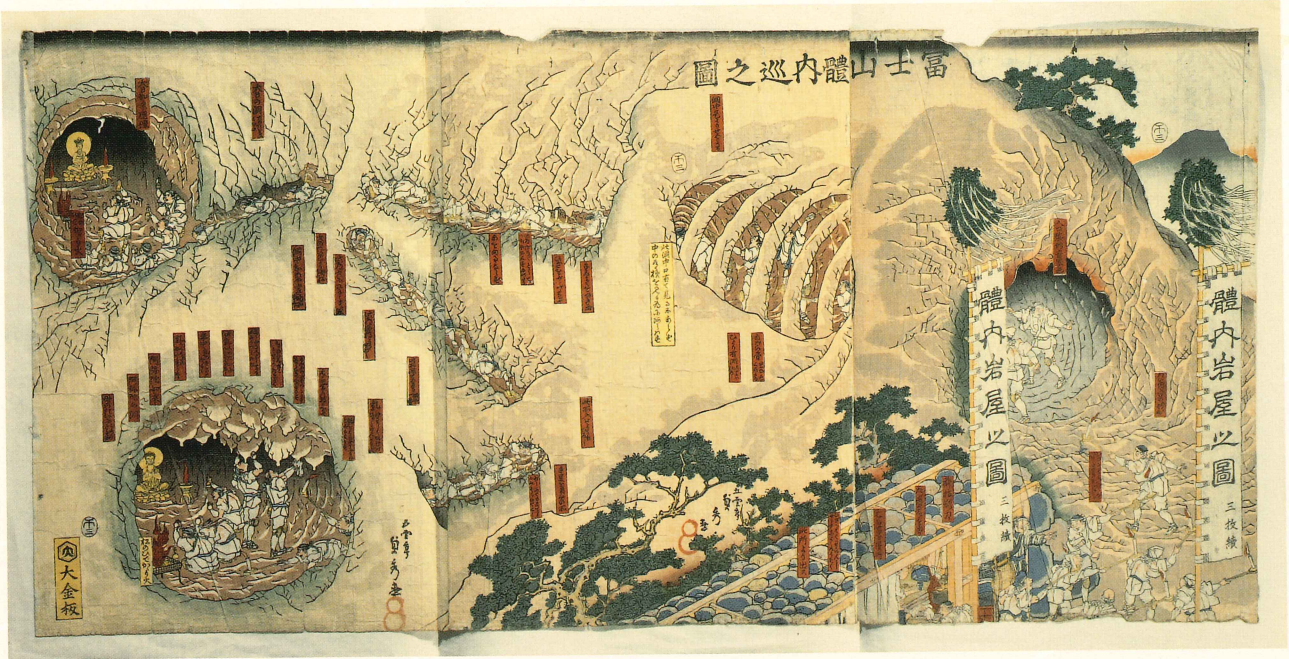
富士登山之全図

五雲亭貞秀筆

小山町立図書館蔵（安田コレクション）

上図の一部を取り上げた、吉田口の「仙元明神本社」（北口本宮富士浅間神社）を基点とする富士登拝の道程を描いた貞秀の版図で、麓の茅原から木立、毛無、そして登頂する道筋を描写する。万延元年（一八六〇）頃の制作と推定される。

中ノ茶屋を右に分岐し、赤い鳥居を潜り、雪代堀を越えると御胎内がある。富士講中が列をなして胎内窟へ出向く様子が描かれる。



富士山胎内巡之図

五雲亭貞秀筆

小山町立図書館蔵（安田コレクション）

富士講中の洞窟修行の一つに胎内潜がある。仏像の胎内や自然の洞窟などをくぐりぬけることで、生まれかわりの信仰による民間習俗のことをいう。浅間明神出現の地とされ、剣丸尾溶岩が生成した船津地内に存在する、人がやっと潜り込めるほどの溶岩洞窟を御胎内として開き、富士講中が胎内潜に利用した。

本図も貞秀の描いた版図で、安政五年（一八五八）制作。洞窟の入口とあばら骨に見立てた部分、その奥に広がる二つの洞窟を図示し、正面奥の大日如来像に一座して祈る人々（大日の洞）や、「阿弥陀の洞」の天井の乳房状の溶岩からしたり落ちる水を口や腹帯に受ける人々が描かれる。神仏分離後、阿弥陀の洞は母の胎内と呼び替えられた。



■主要参考文献

『富士吉田市史 史料編5 近世Ⅲ』富士吉田市 1997年
『北斎と広重 ふたりの富嶽三十六景』山梨県立博物館 2007年

※このリーフレットは平成29年度に開催した企画展「再現 富嶽三十六景の世界」『マグマの大地『まるび』』の内容を再構成して製作した。

※編集は調査・研究スタッフ 堀内 真が担当した。

※本展示にあたっては下記の諸氏、諸機関からご教示・ご協力を賜った。

杉本 悠樹 堀内 亨 富士河口湖町大嵐区
富士河口湖町教育委員会 北口本宮富士浅間神社
山梨県立博物館 小山町立図書館

山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301 山梨県南都留郡富士河口湖町船津 6663-1
TEL 0555-72-0259